

隅田川と江東地域 ⑥

隅田川沿いの名所と月岑・広重

江東区深川江戸資料館

江戸時代以前、「名所」の文字は「などころ」と読み、和歌のなかに詠まれる地名のことでした。京都で、はるかな武蔵の地を思いながらつくられた和歌に、隅田川や待乳山^{まちちやま}などが出てきます。江戸時代に入り、人びとが実際に行く場所としての「名所」をめいしよと発音するようになり、訪ねるためのガイドブックともいえるべき書物が江戸で出版されるようになるのが延宝5年(1677)のことです。

中世以前の「などころ」からの伝統をもつ隅田川は、江戸名所としても随一^{ずいち}といわれました。今号では、江戸時代後期に江戸名所を描いた双壁、^{さいとうげっしん}齋藤月岑と歌川^{ひろしげ}広重のみた隅田川を紹介しましょう。

月岑のながめた隅田川

『江戸名所図会』の著者齋藤月岑は、文化元年(1804)江戸に生まれました。齋藤家は、代々^{きぢちよう}神田雉子町の名主を務める「草創名主」の家でした。「草創」とは、江戸時代、土地を切り開き新町村を設立した人のことで、代々世襲で名主を務めることが多かった中で、月岑も父・^{ゆきたけ}幸孝を継いで町名主を務める傍ら、祖父幸雄、父幸孝と三代に^{わた}亘って継承してきた『江戸名所図会』の編纂事業を完成させ、天保5年(1834)と同7年に分け全巻の刊行を果たしました。その後、天保9年に『東都歳事記』、嘉永元年(1848)に『武江年表』正編など、多くの著作を世に出しています。

江戸の絵入りの地誌『江戸名所図会』は、記述の内容・長谷川^{せったん}雪旦による絵画ともに高く評価され、江戸研究に欠くことのできない文献となっています。同書の中で月岑は、江戸の名所の代表は、武蔵野と隅田川であると明言して、6巻7巻の2巻に亘り53の小見出しで隅田川沿いの各地を紹介しています。具体的なひとつひとつは、65号の表で詳細にみることでできるので繰り返すことを避けませんが、月岑は、吾妻橋から千住大橋までの上流部分について、隅田川そのものを名



『東都歳事記』より「隅田川看雪」(深川江戸資料館蔵)

所と考えていたことがしられます。

また、『東都歳事記』に記述された隅田川沿いの年中行事は、86に及んでいます。代表的ないくつかを挙げると、浅草寺の修正会に始まり、深川万年橋での初富士(元旦に富士山を見ること)、隅田川納涼、吾妻橋際の^{ゆきみ}看雪などです。

『江戸名所図会』『東都歳事記』に多くの隅田川の名所をとりあげている月岑の隅田川への関心のふかさを裏付けるように、『齋藤月岑日記』によると、月岑は、たびたび隅田川沿いに行っています。天保元年の日記中には、このような記述が16回見られ、そのうちの6回は、行き先が深川での開帳や、元八幡の花見です。隅田川を渡って行ったことがわかります。また隅田川沿いの名所行きのなかで最も回数の多いのが浅草寺と待乳山への参詣です。天保元年1月3日、6月7日、同23日と浅草寺と待乳山に参詣し、12月17日には浅草の歳の市にでかけて一年を締めくくっています。

広重の描いた隅田川

齋藤月岑による『江戸名所図会』を江戸名所に関する地誌の最高峰と位置づけるなら、絵画のジャンルでは歌川広重による「名所江戸百景」シリーズといえるでしょう。

『名所江戸百景』に描かれた隅田川沿いの主な名所
(上流から順におもなものをを抜粋)

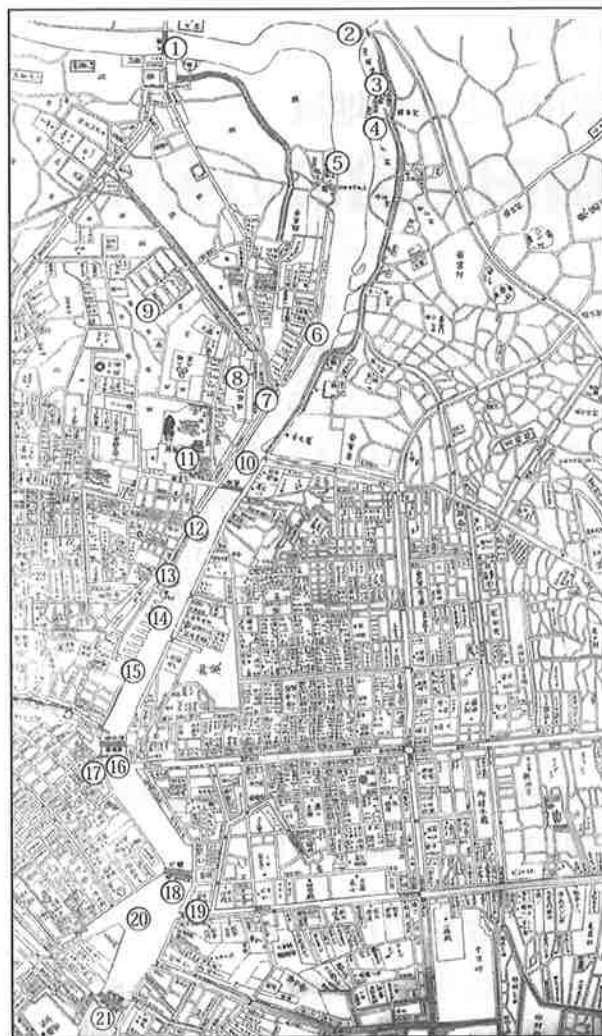
1 千住の大はし	12 駒形堂吾嬭橋
2 綾瀬川鐘ヶ淵	13 御厩河岸
3 隅田川水神の森真崎	14 浅草川首尾の松御厩河岸
4 木母寺内川御前菜畑	15 両国橋大川端
5 真崎辺より水神の森	16 浅草川大川端宮戸川
6 墨田河橋場の渡かわら竈	17 両国回向院元柳橋
7 待乳山山谷堀夜景	18 大はしあたけの夕立
8 猿わか町よるの景	19 深川万年橋
9 廓中東雲	20 みつまたわかれの淵
10 吾妻橋金竜山遠望	21 永代橋佃しま
11 浅草金竜山	

歌川広重は、本名の安藤姓でも知られる江戸時代後期の著名な浮世絵師です。寛政9年(1797)に江戸で生まれ、安政5年(1858)江戸で多数の死者を出したコレラに罹患して没したといわれます。風景画を得意とする広重は、安政3年から同5年にかけて「名所江戸百景」を出して名声を博しました。このシリーズは、「百景」という表題ですが、全118景から成っています。このうち、29景が隅田川沿いの名所です。さらに、広義の隅田川沿いとして、深川の名所として描かれた深川八幡山ひらき、木場、洲崎十万坪、深川三十三間堂の4景を加えると33景となり、シリーズ全体の約28%を数えます。そのなかには傑作の評もある「大はしあたけの夕立」が含まれ、広重の隅田川へ寄せる思いのふかさがみてとれるといえるでしょう。

広重と月岑—江戸名所のしかけ人—

ほぼ同時代を、一方は絵師として、一方は地誌の編集者として生きた、広重と月岑。ふたりに共通しているのは、ともに江戸で生まれ江戸で育ったという点です。そして、限りない江戸への愛着がその作品にあらわれています。

しかし、両者には大きな違いもあります。月岑の描く江戸名所は、たとえば向島のような風光明媚な田園風景の名所であっても、風景と行き交う人びととともに描かれ、名所らしい賑わいを感じられます。それに対し広重の描く名所は、風景のみであったり「深川洲崎十万坪」のように荒涼とした寂しささえ感じられるものもあります。行こうにも、交通手段のないような場所もふくまれています。この違いは、前者が「案内書」であったのに対し、後者は「芸術作品」として



売れるものでなければならなかったということから来ているのでしょう。それぞれの観点から江戸名所を描いた広重(1797～1858)と月岑(1804～78)ですが、ふたりは出会っていたのでしょうか。『斎藤月岑日記』には、弘化3年(1846)から数年の間に広重がたずねて来たことを記述した箇所がみられます。

挨拶や資料の借用などの用件であったようです。なお、月岑と組んで『江戸名所図会』『東都歳事記』を完成させた絵師、長谷川雪旦については、その生活全般について知る資料がなく、広重との接点を見出すことができません。

広重と月岑は、「絵師」と「編集者」という業績の違いはありますが、ともに隅田川に深い関心を寄せていたこと、江戸庶民の名所めぐりの流行に貢献した「江戸名所のしかけ人」であったことは間違いありません。その意味で、広重と月岑の隅田川への思いは、江戸の人びとの隅田川に寄せる思いを代表していると考えられるでしょう。